
完全無欠少年と八方美少女

混手 軽村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

完全無欠少年と八方美少女

【Nコード】

N9582F

【作者名】

混手 軽村

【あらすじ】

早田葵《はやたあおい》は、自らを幼少時代から完全無欠少年と自負している青春真っ盛りの中学生。そんな自称完全無欠少年が恋という達成難解な鉄壁を通じて本当の完全無欠を目指し成長していく物語第一弾！

プロローグ

「天は二物を与えず」という言葉を知った小学生だった僕は、自分はきつと神様に認められた特別な存在なんだと思った。

足も速いし、球技なんでもってこい、それに勉強もできてテストなんかいつも高得点、何もかも完璧で僕こそが完全無欠少年に相応しくて、いつか時代の先頭に立つ男になるんだらうと幼い心で思っていた。

小学校を卒業し、中学に入学しても、その思いは変わらなかった。僕より頭のいい奴にもスポーツなら負けなかったし、スポーツで負けても勉強で負けることはなかった。だから間違いなく、時代の頂点に立つ人間なのだと思うていた。

彼女に会うまでは…。

第一章

学校生活にも慣れてきて、所属しているサッカー部でもかったるい球拾い期間が終了して本格的な部活を満喫し始めた中学一年の秋、夏休み明けのテスト結果が出た。

僕は学年三位をとったが、まだ納得がいつてなかった。

またこいつか…

僕は順位掲示板を見上げて落胆していた。

前回のテストは四位で、今回のテストは今まで以上に頑張ったつもりでいたが、上には上がいた。学年一位の遠藤崇という男はクラスメイトで、彼は部活もやらずに勉強一筋の奴だから別にそれはよかった。

ただ、学年二位の中野友季は顔も知らなかった。しかも彼女は前回のテストも学年三位で負けていたので悔しかった。

僕はだんだん彼女のが気になり始めていた。

「葵！オレに勉強を教えてくれ！」

僕が掲示板を眺めていると焦りながら一人の少年が駆けつけてきた。彼の名は堂本晃。クラスは違うが部活仲間だ。彼はスポーツ万能で部活ではいつも一緒に練習をしている仲だ。ただ、彼は勉強は苦手だった。

「先生に、次のテストもこの調子だったらしばらく部活はやるなって言われたんだよ…。部活がなくなったら、オレの青春がああ…！」

彼は相当嘆いていた。

掲示板を後ろの順位から見っていくと彼の名はすぐに見つかった。

「赤点とらなかつただけよかったじゃん。晃は部活に没頭しすぎなんだよ。」

「そんなこと言っただってさあ、何でお前は両立できてんだよ…。部活終わったら疲れて寝ちまうだろ普通。」

「そこを頑張らないといけないのがスポーツマンだろ…わかったよ。テスト近くなったら一緒に勉強しよう。」

「サンキュー！わりいな！助かるよお！」

晃は安堵しきつた顔でしゃがみこんだ。

「なあ、晃。お前、あの中野友季ってやつ知ってるか？」

僕がそう聞くと晃は途端にニヤニヤしはじめた

「なんだ、お前が女子のこと気にするなんて珍しいな。しかもあの中野友季か。」

「べ、別にそんなんじゃないやねえよ。ただいつも俺よりいっこ上にいるからさ。どんな奴か気になっただけだよ。」

「ふうん…なるほど。たしかに頭いいって噂だしな。それに可愛いらしいぜ！灘川がクラスメイトだから、あいつに聞いた方が詳しいと思うよ。」

灘川は部活仲間だ。彼もよく僕と晃と練習する仲間だ。僕はとりあえず灘川の元へ向かった。

彼は背が高いから、すぐに見つけられた。

「よっ、灘川。」

「おお、早田か。どうした。今回のテストもすごかったなあ。」

「まあ、ちよつとがんばったからな。それより、お前のクラスに中野友季っているだろ？どんなやつだ？」

すると彼も晃と同じような含み笑いをし始めた。

「なんだ、早田も気になるのか、中野のこと。お前は女に興味なんてないと思ってたけどな。」

…晃といい、そんなに僕は女子と縁がなさそうなのか。

「そんなんじゃないやねって。ただいつもあの子にテストで負けてるんだよ。知らない奴に負けるのは納得いかねえからちよつと気になつてな。」

「なんだ、そんなことか。つまらん。まあ、たしかに中野は頭いいからな。美術部も頑張ってるのに勉強もできるって女の子に評判だよ。ま、もちろん男にもな。たしかに可愛いよ。」

美術部か…それよりやっぱり男にも人気があるらしい。ますます気

第二章

夏休み呆けもようやくとれてきて、だんだん夜になると冬が顔を出し始めてきた、とある秋の日曜日、僕は部活も休みだったので、近くの図書館に来ていた。

だんだん受験生らしき学生の姿が見え始め、図書館にはいつもより人がいた。

そんな中、勉強の休憩がてら本を探していると、自分より背の小さい女の子が高い棚にある本を取ろうと頑張って背伸びをしていた。

その姿には少し心をくすぐるような可愛らしさがあった。

女の子は背伸びをしても届かない本をじっと見上げ、少し困った様子でキョロキョロし始めた。そこで僕は目があった。

二重がくつきりしていて少し垂れた優しそうな目で、それでいて触らなくても流れるようにサラサラだとわかるくらい美しく輝いた黒髪を持つ女の子に、僕は少しドキッとしてしまった。

僕は幼馴染みの女の子としかあまり話したことがなかったので、緊張しながら近づいて行って

「本、とってあげるよ。どれ？」

と言つとその子は

「これ…っ！」

と、背伸びをして一冊の本を指差しながら苦しそつにいった。

その本は、夏目漱石の

「こころ」という本だった。

それを手に取り、彼女に渡す。

「ありがとう。この本、読んでみたくなって。」

顔を赤らめて恥ずかしそうに言う彼女を見て、なぜか僕は心臓が飛び出そうだった。それを隠すように少し微笑んでその場を去った。

机に戻ってもドキドキは止まらなかった。僕は初めて女の子が可愛いと思つてしまった。今まで可愛いなんてこと思つたことなかったのに…。中野友季もあれくらい可愛いんだろうか…。さつきうまく笑えてたかな…

勉強しようとしても、全く頭に入ってこなくて、かわりにあの女の子の顔が頭から離れなくなっていた。

でも、その中で、不思議なことにあの子の顔を見たことがあるような気がした。

どこか昔に見たことがあるような…でもあんなに可愛いのなら、芸能人に似たような顔がいたのかもしれない。
名前くらい聞いてみればよかった…って僕は何を考えているんだっ。忘れよう…

そう思って、僕は図書館を後にした。

家に帰って、ご飯を食べて、風呂に入って、また勉強を始めようと思っても、まだあの子のことが忘れられずにいた。

僕は頭が変になっちゃったのか…

寝れば忘れるだろうと思いい、僕は早めに布団に入った。

次の日、僕は寝坊をしまして朝練習に間に合うように走って学校へ向かっていた。
ギリギリ間に合って、練習が終わる頃にはもうあの子のことは頭から薄らいでいっていた。

「そろそろ次のテストちかづいてきたぞ！やべえ〜！葵！勉強教えてくれ！」

放課後、いつものように晁と帰り道を歩いていると晁が嘆いてきた。

「冬休みもまだだから大丈夫だよ。そう焦るなって。」

「でもよお、次は学年末だから範囲が今までより長いだろお？お前みたいに頭よくないから、早めにやらないとヤバイんだよお……。」

「わかったよ。じゃあ日曜日、部活が終わったら図書館に行こう。」

図書館……という言葉が口にした瞬間、またあの子が頭の中に出てきた。

「どうした？葵、なんか悩みでもあるのか？オレがきいてやってもいいぞ。」

晁は鈍いのか鋭いかわからない男だ。僕は何を血迷ったか、晁にあの子のことを話してしまった。もしかしたら、誰かに話したかったのかもしれない。

「へえ、そんなに可愛かったのか。じゃあまた図書館にいるかもな！」

「いてもいなくても、僕はみっちりお前をしごいてやるから安心しろよ。」

「くう〜っ。こりゃ地獄の日曜日になりそうだ。」

「なあ、晃。お前人を好きになつたことある？」

「なんだよ急に真剣な顔で。オレはサッカー一筋だぜえ〜！」

はしゃぐ晃と笑いながら、僕は密かに心のどこかであの子がまた図書館にいたらいいなあって思っていた。

次の日曜日。

「うお〜、今日も疲れたぜえ…」

部活が終わってスポーツドリンクをぐびぐび飲みながら晃が声を枯らして言った。

「でも今日は図書館にいくんだからな。地獄はこれからだぜえ〜。」

僕が笑いながら言つと

「忘れてたあああ…今日はやっぱり家で休まね？お前も疲れてんだ

る？」

「図書館に行くのはお前のためなんだからな？早くいくぞー！じごく時間がなくなっちまう。」

「オレのためとか言っというて、お前はあの子が気になるんじゃないの？」

と、ニヤニヤしながら凶星を言ってくる晃に焦りを感じ

「ば、ばか！んなわけないだろ！？罰としてめっちゃしごいてやる！早くいくぞ！」

晃が、まってくれよお。と急いで着替えてる中で、僕はまたドキドキし始めていた。

いるかな……。いたら何て話しかけようかな……。僕のこと、覚えててくれるかな……

頭ではそんなことを考えながら、晃と図書館に向かった。

今日も図書館にはたくさんの人がいた。僕らはちょうど空いた席に座って晃が教科書を開き始めた。

「まずは数学だな。オレ図形だめなんだよなあ……」

僕は三角形について晃に教えて、後は晃が問題を解くだけになった。

「じゃあ僕は暇潰しに読む本を探してくるから、ちゃんと問題やってみよう。」

「はいはい、あの子を探しにね。早く帰ってこいよ。」

「ばっか。」

馴れ合いをした後、僕は本を探しに行った。どんな本を読もうか迷っている、ふと、夏目漱石の

「こころ」が頭に浮かんだ。

あの子が読みたかったのはどんな内容だったのかな…

ぶらぶらして、僕はあの本棚の前に来た。

ここに来れば、あの子がまたいるかもしれないと思ったけど、そこには誰もいなくて少しがっかりしてしまった。

「こころ」があった場所を見ると、そこにはもうあの子が返却したそれが置いてあった。

僕はそれを手に取り、晃が待つ机に向かった。

机に戻ると晃は頭を抱えていて今にも耳から煙が出てきそうなほど悩んでいた。

「なあ、葵。やっぱわかんね…」

僕は呆れながら晃に問題の解き方を教えていき、気づけば閉館時間になっていた。

「いやあ〜。今日は勉強したなあ〜。お前のお陰で三角形はばっちりだぜっ！」

自信に満ちた晃を見て、僕は役に立ったことに少し喜びながらも、あの子が読みたがってた本を結局読めなかったことに少し悲しんでいた。

本を元の場所に戻しにいくときにも、無意識にあの子のことを探してしまっていた。

今日は来なかつたんだな…

内面少しガツカリしながらその日は家に帰った。

それから僕は、部活が早く終わる時は必ず図書館に行くようになった。

それでも、あれからあの子の姿を見ることはなく、部活も大会が始

まったり練習試合があったりで、図書館にも行かなくなり、だんだんあの子のことを忘れるようになっていった。

第三章

完全に寒さが四六時中、身にしみるようになってからしばらくたった12月の日。いわゆるクリスマススイヴィヴの23日に僕は待ちに待った長期休みに入った。とは言っても、部活もあるし、休み明けには学年末テストがある。∴それになんといつても、クリスマスを一緒に過ごす彼女なんているはずもない。

僕は、どうやらそこまでませた少年ではないらしい。完全無欠にちよつとヒビが入った気がした∴。

「彼女なんていらねえくдарoo!まだ中学生だぜっ?オレとサッカーで青春を謳歌しようじゃないかっ!」

冬になつても、晁は夏のように陽気で熱い男なので、すこし辺りが暖かくなった気がした。

「そつだよな。まだ中学生だもんな。部活に勉強に、僕らは忙しくて恋愛なんてしてる暇ないもんな!」

僕は終業式の帰り道をいつものように晁と帰っていた。

「よっし!そろそろ本格的に勉強はじめようぜ!明日明後日部活ないから図書館付き合え!」

明日も明後日も部活はなかった。どうやら彼女がいる先輩たちが休みにしたらしい。どっちにしても、僕らに彼女はいないから晃の提案をのむことにした。

「じゃあ明日な〜。」

分かれ道で僕らは別れた。

図書館かあ…。そういえばあの子は何をしてるんだろうか。あんなに可愛いんだから、きつと明日は彼氏と過ごすのかな…。

家について明日に備えて早めに布団に入った。

次の朝、やる気のある晃は集合時間より30分も早く来ていたらしく、

「遅いぞっ！」と腕を組みながら言った。…ってか集合時間5分前に来たのに遅いって…

そんな風に思いながら、僕ら二人は図書館へ向かった。

久しぶりに図書館に来た僕らは人の多さにビックリした。受験が近づいてるだけあって、図書館には学生でいっぱい座席がないほ

どだった。

「おいおい、せつかくやる気出たのに勉強できないじゃんかよお……」

晃はガツカリしてしゃがみこんでしまった。

晃には気が抜けるとしゃがみこむ癖があった。

さて、どうするかな…と考えていると。僕は近くにあるファーストフード店で勉強することを思いついた。

その提案にしゃがみこんでいた晃は全身で賛成し、僕らはファーストフード店へ向かった。

コーラとジンジャーエールをそれぞれ持って僕らは空いていたテーブル席に座って教科書を広げた。たまに晃が、わからないいと嘆き出すけれども、集中して勉強できた。晃も、あれから少し自分で勉強したのか、以前よりも問題を解けるようになっていた。

「ちよつと、休憩するか。」

と、僕が声をかけると

「この問題が終わったら！」
と教科書を睨めながら言った。
一体晁に、何が起こったのか…。黙々と文字を書いていく晁の様子を見ていた。

「だああああ〜終わったあああ！って、何見てんだよっ！」

「いや、あんまり熱心にやってるからさ。心配しちゃって。」

「おいおい、忘れたのか！？オレはこのテストに全てがかかってるんだよ！部活のためなら勉強だって頑張るさ！」

その熱心な気持ちを部活に関係なく持ってくれたらいいのにな…と
という言葉は胸の内に秘めておいた。

「なあ、明日も多分図書館に行っても席ないと思うんだよな。あの
図書館狭いし。」

今日はクリスマスイヴだというのにあんなに人がいたんだから明日
も当然いるに決まってる、と思った。

「だからさ、隣の市の図書館に行かない？あそこなら広いから、空
いてないってことはないと思うんだ。」

僕の提案に晃は目を輝かせ

「おお！隣の市に進出かあ！なんかワクワクしてきたな！」
と大賛成してくれた。

その後しばらく勉強を再開した後、明日の集合時間を決めて、僕らは帰宅した。

晃は明日も集合時間を早くしたので僕は風呂に入り、早めに布団に入った。

次の日、僕は10分早く集合場所に到着すると、相変わらず晃はすでにそこにいた。

僕が晃に遅いと言われたのは言うまでもない。

そんなことを気にせず、僕は切符を買って電車に乗った。隣の市の図書館は二つ離れた駅にあるので、すぐに到着した。

しばらく歩いていると、大きい洋風の建物が見えてきた。

「いやあ、やっぱりでかいなあ！オレらの市の図書館とは大違いだな！」

晃は市外にあまり出たことがないらしく、めっちゃめっちゃ興奮していた。

たまに来る僕でも、やっぱり大きいと思う、その図書館に僕たちは入っていった。

やっぱり人が多いことにはわりはなかったが、席にはまだ余裕があった。

ときとうに席に座り、二人は勉強を始めた。

しばらくして、勉強に疲れた僕は、頭を抱えている晃を置いて図書館内を見て回ることにした。

この図書館には僕らの市の図書館には置いてない本がたくさんあるから、歩いているだけで楽しかった。

ぶらぶら歩いていると、一人の後ろ姿に目が止まった。あのキラキラした黒髪は…もしかすると…。

近づいてみようと思っても足が動いてくれない…。

立ち尽くしているとその人が机の上を片付け始め、こっちを振り向く……え？

その人は髪型は変わっていたが間違いなくあのときの女の子だった。

ただ、彼女は涙を流していた…。

僕に気づかずにその場を去る彼女。

僕は彼女がいなくなっても動けずに立ち尽くしていた…。

第4章

しばらくして席に戻った僕は、シャープペンシルを持ったまま何も書かずにいた。

あの子はなぜ泣いていたんだろう。その事が頭の中を支配していた。隣では晃が蛍光マーカーを持ったまま頭をつなだれていたが、それに突っ込む考えすら浮かばなかった。

「悪い、晃。今日はもう帰るわ。」

晃はどうやら考え事をしていたらしく

「わかった、先に帰っててくれ。」

と険しい顔をしながら言った。

僕はそそくさと後片付けをして、図書館を後にした。

その日から僕は、何をやるときもあの子のことが頭から離れずに勉強も部活もまともにできずにいた。

年が明け、晃と灘川から初詣の誘いがあったが、それも断って、とにかくあの子を頭から離すように無理矢理勉強をするようにした。

新学期が始まり、早速テストが始まった。

年明けから部活以外の時間をほとんど勉強をして過ごした僕は、今まで以上に問題をスラスラとこなしていった。

そういえば、晁はあれから勉強したのだろうか…昼休みに晁のクラスに行ってみると、入ってきた僕に気づいた晁が手を振ってきた。どうやらうまく乗りきったらしい。

「いやあ、問題が簡単になってた気がしたよお。やればできるんだなあ。オレは。」

自分で自分を誉めちぎる晁を見て安心しながら少し話していると、予令のチャイムが鳴ったので、僕は自分のクラスに向かった。

クラスに戻る途中、廊下で後ろから肩を叩かれた。振り向くと、前髪をピンで留めていて肩に届くか届かないかくらいの茶色がかった髪の毛の女の子、幼馴染みの石川楓だった。

「なんだ、楓か。どうした？」

「なんだとは何よつ。失礼ねつ。せっかく久しぶりに見かけたから声かけてあげたのにつ。」

たしかに会うのは久しぶりだった。この中学校は近くに小学校が3校もあるから、集まる人数も他の中学校より多いのだ。

「悪い悪い。久しぶりだな。テストはどうだ？」

「私はあんたと違って人並みだからね、真ん中ちよい上くらいよっ。部活が楽しいから、勉強なんてなかなかできないわっ。」

楓は吹奏楽部に所属していて、いつも夜まで練習が続いてると以前言っていた。

「そうか。吹奏楽やってて真ん中より上なら上等じゃん。じゃ、次のテストが始まるからまたな。」

「たまには声かけなさいよ？」

僕は内心、楓が少し可愛くなっていたなと思った。実際、楓のことが好きな男子もちらほらいるらしかつた。

たしかに可愛いかもしれないけど、性格がキツイからなあ…
なんて思いながら僕は教室に戻って、次のテストの準備をした。

全てのテストが終わって、帰る支度をしていると、晃がやって来て

「葵！オレ今日用事があるから先に帰るわ！」

と行ってロケットのように行ってしまった。

仕方ない、今日は一人で帰ろう。

鞆を持って、昇降口に向かって歩いていくと、ふと

「美術室」の文字が目飛び込んできた。

美術室ってこんなところにあつたのかあ…と、思いながら中を覗いてみると、三つ編みをしたきれいな女子生徒が一人、絵を描いていた。

その光景にちよつと目を奪われていると、彼女と目があつてしまった。変なやつに思われるかとあたふたしていると、彼女は優しく微笑みながら

「あら？入部希望かしら？」

と言いながら近づいてきた。

すぐおしとやかな声と微笑みにドキドキしながら

「あ、その、そうじゃなくてですね…」

「うちの部は歓迎よつ。テストも終わったことだし、ゆっくり見学していきなさい。」

僕があたふたしているのもお構いなしに、彼女は僕の手をとって室内へと連れ込んだ。

僕は女の子と手を繋ぐのは小さい頃以来だったから、緊張して顔が熱くなつていくのを感じた。

「あ、あのっ！僕はサッカー部に入ってますので、し、失礼しますっ！」

と言つて美術室を飛び出した。

その時に、美術室に入って来ようとした女子生徒とぶつかりそうになったが、顔を伏せながら謝つて、昇降口へ走つた。

昇降口に着いて、靴に履き替え呼吸を整えてから帰路についた。

しかし、あの美術部の人、先輩かな…おしとやかなのに強引で、不思議な人だったなあ…

と思いつつながら、テストもあつたせい、疲れがどつと出たので、寄り道せずに家に帰つた。

二日後、学年末テストの順位が発表された。

休み時間に掲示板を見に行くと、僕は…三位だった。また中野友季に負けてしまった。あんなにやっても勝てないのか…

しかも今回、彼女は遠藤も越えて一位になっていた。
もう中野友季は雲の上の存在のような気がしてきた…。

ショックで呆然としてしていると、晃がやって来て

「葵！オレ、頑張ったわあ！先生も許してくれたよ！」

と満面の笑みではしゃぎ出した。愉快なやつだなあと、掲示板を見ると、晃は真ん中辺りまで順位を伸ばしていた。

よかったじゃん！すげーじゃん！天才じゃん！などといって晃を誉めちぎっていると、ふと視界に図書館のあの子の姿が入ったような気がした。

もっと言え、もっと言えとのろけている晃を放って、僕は駆け出し、辺りを見回したけれども、あの子の姿はなかった。

「いきなりどうしたんだよお。お前が急にいなくなるから、独り言話しちゃってたじゃんかよお…。」

と、ぶつぶつ言いながら後を追ってきた晃に、何でもなかった。と、笑いながら誤魔化して、それぞれの教室へ戻った。

机に着いてもまだあの子の姿のことを考えていた。確かに僕は、あの子の姿を見たはずなんだ。この学校の生徒なのか…それともただ単に僕の見間違えか…。

そんな思いに耽っていると

「早田くん、今回も三位だったね。」

と、柔らかい声が聞こえてきた。顔をあげると、クラスメイトの梁瀬沙希だった。

「あつ、…ごめんね。考え事の邪魔しちゃった？」

と申し訳なさそうに言う梁瀬をフォローするように

「あ、いや、別にそんなことないよ！梁瀬だって順位高いじゃないか。」

と言うと、彼女は顔を少し赤らめて

「そ、そんな…たまたまだよ。数学が苦手だから、いつもこれ以上順位上がらないよ。」

「でも、国語はいつも梁瀬には勝てないよ。すごいよな。図書委員もやってるし、本好きなのか？」

「うんっ。大好き。本読んでもとすぐ時間なんて過ぎちゃうもん。」

いつもはあまり目立たない性格の梁瀬も、好きなことを話すときはやっぱりおしゃべりになるんだな。と、思っていると、ふとある本が思い浮かんだ。

「なあ、梁瀬は夏目漱石の『こころ』って本知ってるか？」

すると彼女は目を輝かせて

「知ってるよっ！『こころ』は夏目漱石の小説の中でもかなり有名なのっ。内容は、読んだ方がいいと思うよ。早田くん、興味あるの？」

「うん、まあ、少しな。」

「それなら今度図書室に来てくれたら、いろんな本紹介するねっ。」

「おう、ありがとう。部活がない日にでも、行くから。」

「うんっ。早田くん、…お話ししてくれてありがとうね。」

「おう！また話そうな！」

「うんっ！」

ちよつと地味な子でも、笑うと可愛いな。なんて思っていると授業開始のチャイムが鳴って、先生が入ってきた。」

「こころ」か…。

ちよつと読んでみるかな…。

その日の放課後、今日の部活は休みという報告を先輩から受けたので、早速図書室に

「こころ」を借りに行った。借りた後もしばらく梁瀬と会話をし、僕は帰宅した。

家に着いて、風呂に入りご飯を食べ、少し勉強をした後、僕は布団に寝そべりながら

「こころ」を読みはじめた。

読み始めて少しも経ってないうちに、眠くなってきた、僕はいつの間にか寝てしまっていた。

ワタシノコト、オボエテル？ワタシハアナタヲ、ワスレタコトハナ
イノニ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9582f/>

完全無欠少年と八方美少女

2010年10月10日06時12分発行